ユーロ危機と市場の熱気

ノーベル経済学賞は有名だが、賞金額では2番目のウオルフソン経済学賞がある。その候補者 5 人が発表された。課題は、ユーロ解体の具体的なプロセスについての提案だ。昨年10月に公募され、受賞者には25万ポンドが与えられる。最終選考の結果は7月に発表される。

この提案が公募された頃は、市場でもユーロ解体論が熱を帯びていた、だが今ではその熱気はどこへいったのだろう。 数ヶ月間で市場の様相は劇的に変化した。

今回の候補者の発表でも話題になったのは、経済学者たちの力作よりも11歳のオランダの少年の提案だ。ギリシャのユーロからドラクマへの転換を図示したスケッチもあり、候補者には残らなかったが、特別に100ポンドの商品券が与えられた。

今年はドルユーロの取引量も減り、為替レートも基本的にレンジ相場だ。昨年はユーロショートで損失を被ったヘッジファンドなども多く、ユーロにネガティブな情報が出ても反応が鈍い。

ユーロが誕生した時のユーロドルのレートは1．17だったが、昨年ユーロ危機が声高に叫ばれたときでも、およそ 1000 ポイントも高いレベルを維持していた。これはユーロが強いというよりもドルが弱いことが大きいが、世界で最も取引量の多いユーロドルだけ取引する人にとっては、ユーロの強さに閉口してもう手を出したくないという気持ちになる。

だがギリシャもイタリアもスペインもこれからだ。緊縮財政を強いられる中で、経済的にも政治的にもこれから本当の困難な局面に直面する。

ウオルフソン経済学賞の受賞者の発表まで 3 ヶ月ある。3 ヶ月は市場の様相が一変するのに十分な時間だ。そのときはもっと受賞者の話題がでてもおかしくはない。